

お茶の水女子大学で実施されるキャリア相談実施件数

山本菜月¹⁾

1) お茶の水女子大学 学生・キャリア支援センター アシエイトフェロー

Number of Career Counselling Sessions conducted at Ochanomizu University

Natsuki YAMAMOTO¹⁾

1) Ochanomizu University, Student and Career Support Center, Associate Fellow

はじめに

お茶の水女子大学 学生・キャリア支援センターでは、進路に関しての相談を全般的に受け付けるキャリア相談を実施している。キャリア相談は、新型コロナウイルスが流行する以前の 2019 年度まで対面での完全予約制および当日受付制によって実施していたが、2020 年度以降は Zoom を利用したオンライン完全予約制で実施している。対面での授業も増えた 2023 年度の夏以降は、一部対面枠や当日受付制も取り入れ、学生のニーズや社会情勢に応じた相談体制を取り入れている。キャリア相談の日ごとの受付枠は時期により異なるが、相談依頼の多い時期 11 月から 6 月では平日 5 日、就職活動が落ち着く 7 月から 10 月は週 3 日でいずれの時期も 1 日 6 枠程度、利用ニーズの特に高い 3・4 月では 10 枠程度設定しての実施となっている。

キャリア相談では、就職活動に直結したエントリーシート (ES) 添削や面接練習だけに限らず、どのような企業を受けようか迷う、民間企業と公務の併願について悩んでいる、といった進路選択初期の相談、進学も視野に含めた学生の情報整理の支援や、大学院入試の書類作成支援や面接練習のうち、専門に限らない受け答えや論理的回答になっているかの確認も対応している。

学生・キャリア支援センターでは、学生・キャリア支援課と共に、キャリア相談担当者が相談にあっている。相談担当者は国家資格であるキャリアコンサルタントやキャリアコンサルティング技能士の資格を持ち、キャリアカウンセリングの知識を持ったアドバイザーが学生からの相談対応に当たっている。アドバイザーは、相談後に相談者や相談理由、対応内容などを

関係者のみ閲覧できるデータベースに残している。このデータベースは、学生の相談来室記録や学生・キャリア支援センター実施のキャリア支援行事への参加状況、企業との面談結果などの学内での進路選択に関わる基礎的な行動データを収集するものである。データベースは、学生がどの行事に多く参加するのか、どの時期に相談利用が多いのかなど全体の傾向を把握し、行事の実施内容や開催時期といった企画面での活用と共に、進路選択のプロセスを把握することで、学生個人の支援にも役立つためのものである。相談面においては、アドバイザー間での日常的な対応の確認・引継ぎや、学生の相談内容に合わせた対応に役立つため、また学生本人の許可を得た上で学生相談室を始めとした他部署への照会のために利用している。

本稿では、データベース上の記録された相談履歴のうち、オンラインでの相談対応が始まった 2020 年度以降の記録を分析する。年度ごとの相談件数の推移や、相談者の所属学部・専攻といった所属ごとの利用割合の推移について記述する。その後、相談記録を学生の卒業年次ごとに分け、相談項目ごとの相談利用タイミングの分析結果について記載する。相談記録のうち、学生個人の相談内容など個人情報に関する内容は取り扱わず、学生が進路について、いつ・どのようなタイミングで相談に来たかを年度別に数値的な面で取り上げ、今後の相談枠の設定に活かすこと、また、就職活動において一般的に取り上げられる「早期化」が本学ではキャリア相談のどのような面で見られるかを記述することが本稿の目的である。

利用件数

分析使用データ

本稿で分析するキャリア相談利用記録データには、

学生からの予約を受けて実施するキャリア相談以外に、学生・キャリア支援センター内で実施するプロジェクトの参加状況や面談記録および既卒者・研究生からの相談も記録されている。本稿ではこれらの通常外の相談記録は分析の対象とはせず、一般在籍学生からの通常相談または個別に支援が必要な学生とのキャリア相談記録 4095 件のみを対象として取り扱う。

分析の対象となる期間は、2020 年 4 月 1 日から 2023 年 10 月 31 日までに実施された相談である。

年度ごとの相談件数および所属学部・専攻別の利用件数

2020 年 4 月から 2023 年 10 月までの年度別相談利用件数および構成比率は、Table1 の通りである。また、年度ごとの相談者の所属学部 / 専攻は Figure1 で示している。

2020 年度は 884 件実施し、学生の区分ごとの件数および構成比率は学部生が 489 件で 55.3% であった。学部利用者のうち、文教育学部が 32.8% と多くを占め、次いで生活科学部の文系学科（人間生活学科および心理学科、以下同様）が 10.3%、理系学部である理学部は 3.2% と少なく、生活科学部の理系学科（食物栄養学科および人間・環境科学科、以下同様）は 9.0% である。博士前期課程生は 366 件で全体の 41.4% を

占めるが、学部生の比率とは異なり、理系学生の利用割合が高くなっている。最も多いのはライフサイエンス専攻の学生で 17.3%、次いで理学専攻の 12% となる。生活工学共同専攻の相談利用者は少なく、1.2% であった。文系では比較社会文化学専攻の 5.8% が最も多く、人間発達科学専攻は 2.4%、ジェンダー社会科学専攻は 2.6% であった。博士後期課程学生の利用は 29 件、全体の 3.4% の利用であった。

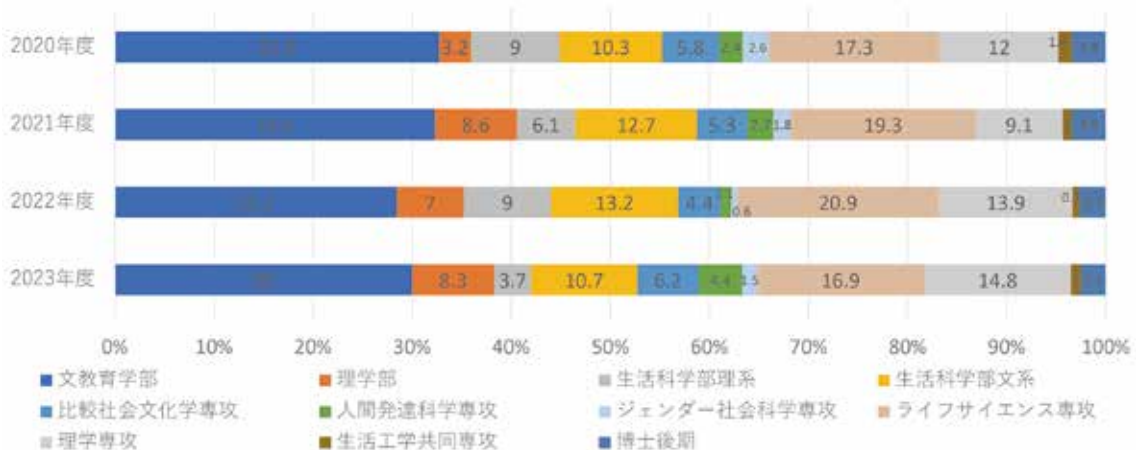
2021 年度は 1329 件実施し、学部生が 779 件で 58.6% であった。このうちの 33.4% を文教育学部の学生が占めている。生活科学部文系は 12.7%、理学部は 8.6%、生活科学部理系では 6.1% となっていた。博士前期課程生の利用は、502 件で全体の 37.8% を占める。内訳は比較社会文化学専攻が 5.3%、人間発達科学専攻が 2.7%、ジェンダー社会科学専攻が 1.8%、ライフサイエンス専攻が博士前期課程の中で最も多く 19.3%、理学専攻は 9.1%、生活工学共同専攻は 1.0% であった。博士後期課程学生は 48 件、全体に占める割合は 3.6% であった。

2022 年度は 1206 件実施し、学部生が 686 件で 56.9% を占めていた。この年度のみ、文教育学部学生の利用が 3 割を切っており 29.2% であった。理学部は 7.0%、生活科学部理系では 9.0%、生活科学部文系は 13.2% であった。博士前期課程生は 488 件で

【Table1】年度別のキャリア相談利用件数

	学部	博士前期課程	博士後期課程	合計
2020年度	489 (55.3)	366 (41.4)	29 (3.4)	884 (100.1)
2021年度	779 (58.6)	502 (37.8)	48 (3.6)	1329 (100.0)
2022年度	686 (56.9)	488 (40.5)	32 (2.7)	1206 (100.1)
2023年度	356 (52.7)	303 (44.8)	17 (2.5)	676 (100.0)

* () 内は合計に占める%を示す、合計は必ずしも100%とはなっていない。



【Figure1】年度別相談者の所属学部・専攻の割合

40.5%となっている。文系専攻である比較社会文化学専攻は4.4%、人間発達科学専攻は1.1%、ジェンダー社会科学専攻は0.6%であった。理系のライフサイエンス専攻は20.9%、理学専攻は13.9%、生活工学共同専攻は0.7%であった。博士後期課程生は32件、2.7%の利用である。

2023年度は4月から10月末までのみの実施件数となるが、676件実施し、全相談件数のうち、学部生が356件で52.7%である。文教育学部は30.0%、理学部は8.3%、生活科学部理系では3.7%、生活科学部文系では10.7%であった。博士前期課程生は303件で44.8%となっており、比較社会文化学専攻は6.2%、人間発達科学専攻は4.4%、ジェンダー社会科学専攻は1.5%、ライフサイエンス専攻は16.9%、理学専攻は14.8%、生活工学共同専攻は1.0%であった。この年度は11月以降の現在も相談を実施しているが、現状では本稿で分析した4年度中で最も理学専攻の利用者が多くなっている。

2020年度に見られた文系学部生の利用が多く、大学院では反転して、理系専攻の中でも、特にライフサイエンス専攻の学生が相談に多く来る傾向は、2021年度以降も続いている。これは、文系学部生の多くが学部卒業後に就職する傾向にあるためと考えられる。また、理系の学部・学科の在籍者は、進学する学生が多くいるが、博士前期課程修了後の進路として就職を考える学生が理系分野では多くいるため、博士前期課程に進学して初めて相談に訪れる者が多いとみられる。博士前期課程学生の中でもライフサイエンス専攻の学生が特に相談利用件数が多いが、この専攻ではより長期に継続してキャリア相談を利用する学生が多い傾向にあった。なお、本稿では博士後期課程学生の相談については、実施数が限られているため、本項にて件数および全体に占める割合のみ取りあげることとし、以降の集計には含めないこととする。

年度ごとの相談項目別件数

データベースでは、相談学生が予約時または相談後の記録として、主にどのような項目での相談であった

かを記録することができる。本項では年度ごとに各相談項目が何件あったかの件数をTable2において提示、記述する。本データベースでは学生の相談内容を1進路相談、2 ES添削、3 面接対策、4 進捗報告、5 自己分析、6 その他に分類している。

2020年度はES添削の割合が特に多く、全体の43.9%を占める375件の相談があった。次いで多い項目は、面接対策が268件あり31.3%であった。その他が146件あり、全体の17.1%である。進路相談は25件で全体の2.9%の割合であった。2021年度もES添削が最多相談項目となり448件で35%、次いで面接対策が408件あり、31.9%であった。進路相談は263件であり、全体の20.5%を占める。2021年度に見られた傾向は、2022年度以降も続いており、進路相談が占める割合は20%台となり、2022年度は319件(27.2%)、2023年度は178件(27.0%)であった。ES添削と面接対策の割合は共に30%程度となっている。ES添削は2022年度が384件(32.7%)、2023年度は237件(36.0%)と常に最も多い項目であり、面接対策は2022年度が369件(31.4%)、2023年度は197(29.9%)と2番目に多い項目となっている。

ESは、インターンシップへの応募にも、採用選考を受ける際もどちらの場合においても必要とする企業・団体が多いため、各項目の中でも多くの学生が相談に訪れる理由となっていることがうかがえる。データベースにおいては1つだけ項目を選択する形式となっており、複数の項目にわたる相談を扱った場合においても、主に扱った内容で記録を付けている。自己分析や進捗報告を行う場合には、ただ話をするだけでなく、実際の記入内容を見ながら自身の理解を深めていくことや、これまでの選考の状況を踏まえて次回予定している企業の選考に向けたES内容の変更や面接練習を行うことも、実際の相談場面では見られるため、これらの項目は集計数が少なくなっていることが考えられる。

本節では、年度ごとの相談件数を全体の数値を記述し、学部や大学院の所属ごとの利用などを概観し、相

【Table2】年度ごとの相談項目別件数

	1 進路相談	2 ES添削	3 面接対策	4 自己分析	5 進捗報告	6 その他	合計
2020年度	25 (2.9)	375 (43.9)	268 (31.3)	40 (4.7)	1 (0.1)	146 (17.1)	855 (100)
2021年度	263 (20.5)	448 (35.0)	408 (31.9)	12 (0.9)	19 (1.5)	131 (10.2)	1281 (100)
2022年度	319 (27.2)	384 (32.7)	369 (31.4)	9 (0.8)	20 (1.7)	73 (6.2)	1174 (100)
2023年度	178 (27.0)	237 (36.0)	197 (29.9)	6 (0.9)	9 (1.4)	32 (4.9)	659 (100)

* () 内は合計に占める%を示す。

談項目ごとの相談件数について確認した。次節では、これらの利用件数を学生の卒業年ごとに分け、各相談項目別に相談を利用する時期の記述から読み取れることについて検討する。

卒業年度ごとの相談内容別件数

本節では、2020 年度から 2023 年度までの間にキャリア相談を利用した学生のうち、学部生および博士前期課程生を卒業年ごとに分けて相談件数を記述する。また、卒業年度ごとに学生がいつの時期にどのような内容を相談に来たのかを集計した結果を提示し、卒業年度ごとの相談来室者の傾向や利用タイミングに関して記述する。

卒業年ごとの件数

Table3 は、分析対象となる 2020 年度以降に学部 3 年または博士前期課程 1 年となったなど、卒業から 2 年前となる学生を卒業年度ごとに区切り、キャリア

相談利用件数を集計したものである。本稿では 2021 年度から 2023 年度の卒業予定者までの件数を取り扱う。

2021 年度卒業生の利用は 1033 件あり、学部は 576 件、博士前期課程では 457 件であった。2022 年度の卒業生は 1154 件の利用があり、学部では 765 件、博士前期課程では 389 件となっている。2023 年度卒業予定者のうち、学部での利用は 567 件、博士前期課程では 538 の利用となっており、合計では 1105 件である。2022 年度卒のみ学部生の利用の方が 6 割以上と多くなっているが、その他の卒業年度では、学部生が 5 割以上、博士前期課程生が 4 割以上となっている。

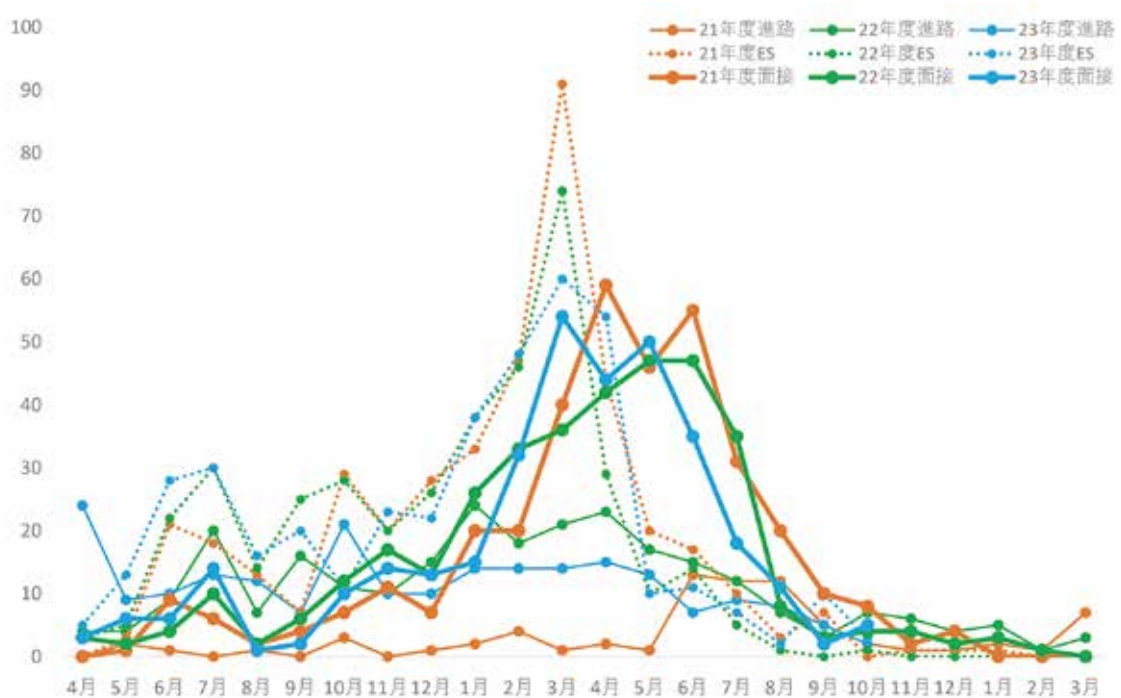
卒業年度ごとのキャリア相談利用項目および来室タイミング

Figure2 は、学生の卒業年度ごとにいつのタイミングで何を相談しに来たかに関する件数の集計結果である。グラフ左端の「4 月」は、一般的に学部 3 年生な

【Table3】 卒業年度別のキャリア相談利用件数

	学部	博士前期課程	合計
2021年度卒	576 (55.8)	457 (44.2)	1033 (100)
2022年度卒	765 (66.3)	389 (33.7)	1154 (100)
2023年度卒予定	567 (51.3)	538 (48.7)	1105 (100)

* () 内は合計に占める%を示す。



【Figure 2】 卒業年度ごとの相談内容別件数

ど卒業まで2年前となった年の4月を意味しており、グラフ中央の「4月」は学部4年生など卒業年度の4月を指す。卒業年度ごとに赤は21年度、緑は22年度、青は23年度を示している。また、相談項目は線の形状で示されており、実線が進路相談、ES添削は点線、面接対策は太実線である。なお、以下では3年次、4年次といった表記を用いるが、学部だけでなく博士前期課程に所属する利用者についても取り扱う。

21年度卒業生の相談利用においては、3年生3月という一般的に就職活動での広報解禁に合わせて、相談件数が最多となり152件を記録する。また、相談内容においては、ES添削件数が最も多く91件である。それに続いて面接対策が4月(59件)や6月(55件)と最も多い件数で相談に訪れている。21年度卒業生は、3年生になり、進路を検討する、インターンシップへの参加を考える時期に、コロナ禍となり、3年次にこれまでとは異なる就職活動を迫られた年次だったと言えるが、3年次の6月にはES添削(21件)や面接対策(9件)に来ていることが分かる。進路相談は他の年度卒業生に比較して、少ない傾向がみられるが、4年次の6月以降に相談に訪れていることも分かった。遅い時期の進路相談は、就職活動を始めたいという相談だけでなく、正式な就職先決定に関する相談や、進学試験を控えた相談、進学後の就職活動に関する相談の場合もあり、いずれの時期においても、一定数の進路相談があることを示している。

2022年度卒業生も21年度の卒業生と同様に、3年生3月が相談のピーク(136件)となっているが、その以前においても、1月は91件(21年度生は67件)、2月は109件(同87件)と年明け以降の利用者数が増えており、21年度卒学生以上に早期からの利用が示されている。本選考のエントリーが始まる3月にES添削は74件と、この群での最多数となっているが、その前年のインターンシップ応募が多くなる6月(22件)や7月(30件)においても、相談件数が増えている。また、インターンシップ参加に向けた時期には、進路相談も多く行われ、20件の相談件数があり、これは年明け1月の24次に次ぐ件数となっている。面接対策の項目において、22年度卒業生は21年度および23年度学生と比較して、本選考時期である4年生の4月(42件)、5月(47件)、6月(47件)といった時期に件数は多くはないが、継続して面接練習を希望する学生が多くいる傾向が示された。

直近の2023年度卒業生も、他の群と同様に3年次3月が143件と最も多い利用件数となるが、3月

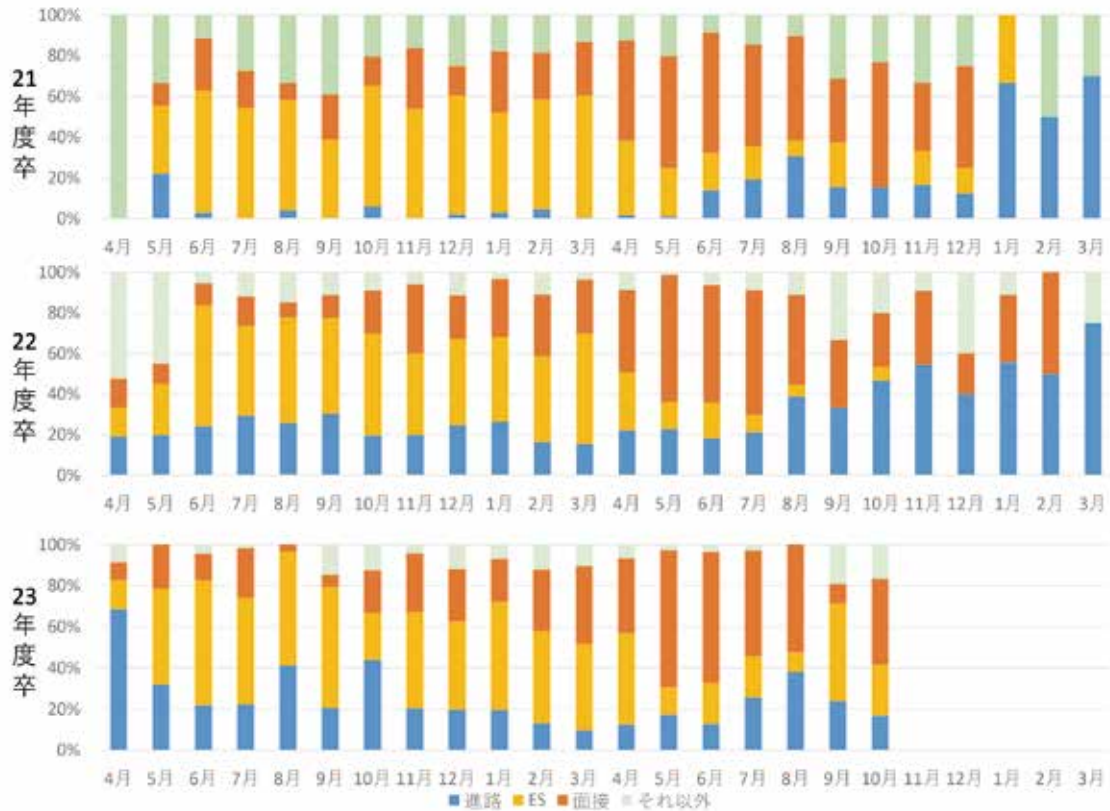
ではES添削は他の群より減少し、60件である。ES添削件数と近い数値で面接対策が54件となっている。図示されているように、面接対策も他の群よりピーク件数は少ないが、ピーク時期は前倒しにされており、また、他の群では4年次4月のES添削数が一気に半数以下に減少するのに対し、23年度卒学生では、4月も継続してES添削が見られる。本選考時期以外に、23卒学生ではインターンシップ応募時期の3年次6月や7月においても、それぞれ28件、30件と応募受付開始すぐから添削希望者が多いことが示された。さらに、進路相談は3年時に進級後、あるいは博士前期1年に入学した直後の4月に24件あり、学年が変わると同時に進路選択に向けて個別相談に来るという行動を起こしている様子が見られた。

続いて、件数だけではなく、月ごとの相談に各項目がどのくらい占めているかを示すため、Figure3では月別に項目ごとの相談率を提示している。なお、グラフ中最上部にある「それ以外」とはTable2で示した「自己分析」、「進捗報告」、「その他」という主要項目以外を指す。

21年度卒学生はES添削を示すオレンジの層が4年4月に入るまで最多項目となっていることが分かる。3年次の夏期インターンシップ応募時期である6～8月は5割から6割を占めており、秋冬のインターンシップや早期選考が続く時期も半数前後を占めていることが分かる。一方面接対策は、3年次秋の11月に初めて3割近い29.7%となるが、それ以降も増減し、4年次4月に49.2%、5月以降は5割を超えて推移する。学生が面接練習に切り替わる4年生になってES添削は急減する傾向にあることが分かった。

続いて、22年度卒学生も同様にES添削が3年次3月まで多数を占め、その後は面接練習が多くなる傾向であるが、21年度と異なりその層は比較的薄く、かわりにグラフ下層にある進路相談が常に2割前後を占めている。特に、夏期インターンシップ申込時期の6月・7月および9月は2割後半～3割を占めており、今後の就職活動に向けて行動を考えようとする動きが見られた。

23年度卒学生においては、3年次4月に進路相談が68.6%と7割近くを占める一方で、3年次の夏期インターンシップ応募時においても面接対策のニーズがあり、早期より就職活動に対する対策が企業などから求められている様子が見えがえた。ES添削は反対に割合として多くあるものの、3年次6月が6割となる以外は4～5割程度が続き、他の卒業年と異なり、



【Figure 3】 卒業年度ごとの項目別相談割合

3年次3月にピークとなるわけではなかった。3月に必ずしもエントリーが開始されるわけではないことが示唆される。反対に3年次1月以降は面接対策の割合が増加しており、インターンシップへの参加のための面接だけでなく、就職活動そのものの面接対策も早い時期に行われていることが読み取れた。

本節では利用学生を卒年ごとに区分し、それぞれの卒業年度ごとに見られる特徴を概観した。各卒業年度とも、学生が4年生になる直前の3月にES添削が多くなってはいたが、直近の学生群においてはピークが分散し、早まった傾向がみられ、また、夏期インターンシップ参加時点から面接対策のために相談に訪れていることが分かった。

まとめ

本稿では、お茶の水女子大学において2020年度以降実施されたキャリア相談の実施件数および学生の卒業年度ごとの相談項目ごとの件数について記述した。キャリア相談の実施件数は2021年度が近年では最多件数であるが、2023年度も全ての月を実施後には、21年度と同等あるいはそれを上回ることが予想され

る。また、就職活動だけにとどまらず、進学なども含めて進路全般を相談では取り扱っているが、利用者としては就職活動で実際に動いている文系学部生および理系博士前期課程生が多く利用する傾向にあることが分かった。

年度ごとの相談項目件数を確認することによって、進路相談が2割、ES添削と面接対策はそれぞれ3割ずつといった傾向が見取れた。実際の相談内では複数の項目にわたる相談が行われることもあるが、これら3項目が中心となってキャリア相談が実施されていることが集計から明らかになった。

また、後半の分析では卒業年度ごとに、学生がどの時期にそれぞれの相談項目について相談を利用しているかを件数および群ごとに占める割合について集計した。その結果、学生は世間で一般的に言われている3年次3月のエントリー解禁に合わせて行動している傾向が読み取れたが、特に2023年度卒業予定学生においては、夏期インターンシップに合わせた対策に行動がシフトしており、一部においては就職活動が早期化していることが相談実施記録から示唆された。キャリア相談は4年生の本選考時期の利用に主軸を置き、3～6月に相談受付枠を多く設定しているが、学生の

実際の動きに合わせて、インターンシップ応募時期である6～7月にも多くの学生を受け入れることによって、さらなる相談利用促進や学生の進路選択に向けた行動促進につながることを期待される。

最後に、本稿では各学生の相談回数や一人当たりの平均相談回数など、学生個別の状況を踏まえた分析は取り上げておらず、より詳細な分析によって、群ごとの学生全体の傾向を把握すると共に、個別のきめ細やかな対応から、支援につなげられない学生にも声をかけていくことは今後の課題である。よく利用する学生の特徴に対応した相談体制をとることで、頻繁に相談を利用する学生のニーズに合わせてことや、これまで相談を利用することのなかった層に対して相談利用を呼び掛けることも可能となる。学生ひとりひとりが望む進路選択のため、大学から支援について今以上に発信していくことも学生支援にとって求められることになる。

謝辞：本資料は、日頃から学生に対応してくださっているキャリアアドバイザーの皆様の記録の積み重ねにより、執筆することができました。現担当者でいらっしゃる方に篤く御礼申し上げます。また、センターで集積しましたデータを資料の形式として、まとめるご許可をいただきました学生・キャリア支援センター長の新井由紀夫理事、山岸由紀特任准教授に感謝申し上げます。

